

# にいがた 勤務医ニュース

発行所  
新潟県医師会  
新潟市中央区医学町通 2-13  
TEL 025 (223) 6381

## チエインソーを 糸鋸に持ち替えて

新潟大学医学部総合病院生  
命科学医療センター長・教授

中 田 光



五年前まで、新宿の国立国際医療センターで、肺胞蛋白質の研究のかたわら、結核や稀少肺疾患の患者を診ていた。歌舞伎町や職安が近く、外来は緊張の連続だった。患者の三割は外国人で、偽の診断書を書けと迫る中国人がいたり、痰からガフキー九号が出ていて、頸椎力リエスで腕が動かさないイスラム系の人が来たこともあった。また、組事務所が多

い地域だったので、一見して関係者とわかる人もいた。待合室で大声で看護師さんに怒鳴り散らしていた上半身総入れ墨の男が診察室に入ってくるなり、「俺は癌かもしれないと言われたんだが、どうなんだっ！」というので、いや結核だから真面目に半年薬をのめば治りますよという、ポロポロ泣いて急に神妙になったのが忘れられない。同じ曜日に結核外来をやっていたベテランの女医さんは、ナイフを突き付けられたことがあったという。一度だけ、私も患者の家族と入院させる、いやさせられないの押し問答になり、「頭かち割るぞ！」

と怒鳴られたことがあった。その時は相手が相当に興奮していたので、本当に頭を割られるかと思った。私が悟ったこと、こういうときは、絶対に相手の視線から目をそらさず、できるだけ穏やかに、しかし、毅然として話すのがコツだ。医者としての職業が私に言葉を発せさせているのだと自分に言い聞かせた。それに比べると新潟の人は実に穏やかだと思ふ。外来に行ってみてもどなり声ひとつ聞かれない。みんな狭い廊下でじつと診察の順番を待っておられる。教授会でも、和気あいあいとしていて、緊張が走ることは、めったにない。根回しという日本の風土が実に機能している。そう思つて、着任して間もないころ、大学で過ごしてきたある先生に「新潟の人はみんな仲がいいですね」というと、ニコニコしながら、「でもね。先生、陰で目一杯足引っ張りますよ」と言われてはつととした。平成十六年以後、ホームペーJや手当など、ちけんセンターの整備、遺伝力ウーセンシング外来の創設、再生医療の立ち上げ、国際共同臨床研究の開始、産学連携事業の開始と生命科学医療センターの立ち上げにスタツプと消耗戦を闘ってきた。その五年間は、その先生のおつしやられた言葉が正しかったと痛感することも多かった。決してあからさまには反対しないが、長い長い話し合いで漸く決まったと思うことでも、実行に移す場面になると、動かないという形での抵抗があった。「新潟は違うんだよ、新潟は」と仰る教授もおられた。

## 故郷に帰って想ひ事

立川総合病院 循環器科 斎藤 淳 志

私はこの原稿を研修医時代を過ごした、兵庫県の淡路島で書いています。私は平成八年に都内の私大医学部を卒業し、初期研修に兵庫県立淡路病院を選びました。まだ現在のような研修制度のない時代だったので(あえて言わせてもらえば現在よりも伸び伸びと、保身を考えずに良い研修ができる時代でした)、私のような研修医は少なかつたと思います。兵庫県の何れでも訪れたことのない土地でしたので、まずは言葉(関西弁、正確には淡路弁)に圧倒された事を憶えています。ただ、研修が始まってしまつと本当に忙しかつたので、細かい事に悩む間もなく数ヶ月が過ぎ、一年経つ頃には私も『エセ関西弁』を話すようになっていました。さて、本題に戻って、『兵庫」と新潟のの違いですが、はつきり言つても何と違ひません。関西だから皆がお笑い芸人のようでは当然なく、明るく、暗

い人、やさしい人、感じの悪い人、結局はこの土地にもいる人達ばかりです。診療内容にしても、あたり前ですが何も違ひがありません。ただ、私の運がよかつたのは、研修病院には神戸大学、兵庫医大、徳島大学、愛媛大学、自治医大から指導医が派遣されていた事です(現在ばかりではありません)。ですから当然若い医師も多大学から集まつていたので、診療をすすめていく上での細かな違い、各医局のやり方を色々学ぶ事ができました。でもそれはあくまでも『たまたま』その病院が良かっただけで、兵庫県内全てが同じではなかつたと思います。兵庫県でも北部地方では冬の気候はほぼ新潟県と同じで、冬の間中厚い雲に覆われ、雪も積もります。その地域はやはり医師不足が深刻で、新聞などで知っている方もいらつしやると思いますが、分散していた病院機能を一つにまとめて、他を診療所化もしくは閉鎖するという苦肉の

## 他県での医療 経験者から見た 新潟の医療



## 沖縄から来て

新潟市民病院 外科 赤松 道成

今年の二月、新潟市民病院への挨拶とアパト探しの目的で、初めて新潟に来ました。天気予報を見て

出発の前の週にあわててダウンジャケットを買いました。那覇空港をでるとき気温は二十四度でした。新潟空港についでみると雪がちらつき、あまりの寒さにここで一年間住めるかと心配しました。しかし四月からいざ住んでみると、お米も魚も野菜も食べるのがみな美味しく、自然が豊かで妻も私もすっかり新潟が気に入つてしまいました。

職場でも多くの良い先生方に恵まれ、非常に楽しく、充実した毎日を送っています。仕事では上部消化器外科グループで、主に食道癌、胃癌の治療に当たらせていただいています。当初、胃癌患者の多さに驚かされました。当院では外科で昨年約一九〇例の胃癌手術症例がありました。また消化器内科でも約一六〇例の胃癌内視鏡治療症例があり、のべ約三五〇例の胃癌を治療しました。沖縄では胃癌は少なく、県内年間胃癌診断数が約三五〇例、手術症例は県内全部で二〇〇例程度で

す。県内に十五を超える総合病院があることを考えますと、必然的に一人の外科医が年間に手術をする胃癌の症例数も限られてきます。しかし市民病院では沖縄県内全部で施行されている手術件数と同等の症例を、一施設、三人の外科医で行なうのです。多くの手術を執刀させていただき、日々たくさんのことを学ばせていただいています。術式についても、沖縄では胃癌、食道癌ともに開腹、開胸手術が一般的で、腹腔鏡、胸腔鏡手術は極一部しか行われていません。しかし当院では胃癌、食道癌手術症例ともに約七十五%を鏡視下手術で行っています。患者さんの負担を考えると、ぜひ沖縄でもそうなることを感じます。もう一点、新潟と沖縄で感じ

る違いは手術患者の体格です。二〇〇四年度の統計になります。沖縄県は日本一太った方が多い県であり、逆に新潟は最も少ない県でした。BMIが二十五以上の割合でいくと男性は沖縄県が四六・九%(全国一位)、新潟県が二五・二%(全国四十七位/四十七県中)、女性は沖縄県が二六・一%(全国一位)、新潟県が一六・〇%(全国四十四位/四十七県中)でした。ご存知のように癌の手術の場合、病変臓器だけでなく周囲のリンパ節も郭清します。この際、体格の良い方ほど血管、リンパ節が見えず切除する脂肪も多くなり、手術に難渋します。まして鏡視下手術の場合、視野がとりづらく、手術時間、出血量も増加します。当然術後の合併症にも影響します。市民病院

で数ヶ月治療に携わって感じるのは、鏡視下手術が主であることや患者の体格の差もあり非常に合併症が少なく、皆が順調に早めに退院していくということです。

新潟、沖縄に限らず常に最善の医療を提供しようと日夜努力を惜みず勉強し、努力している医師をみると、私もぜひこちらで学んだことを少しでも沖縄の医療に還元できるように努めていきたいと強く感じます。また多くのことを学ばせていただいている以上、少しでも新潟の方々に、医師、コメディカルの方々にお返しできるよう努力していきたいと思ひます。

